

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 加藤 真生

論 文 題 目

帝国日本の形成と  
日清・日露戦争における感染症問題

論文審査担当者

主査 名古屋大学准教授 河西 秀哉

委員 名古屋大学教授 池内 敏

委員 名古屋大学教授 古尾谷知浩

委員 名古屋大学教授 齋藤 夏来

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

近代日本初の本格的な対外戦争である日清戦争では、日本の戦死者のうち約9割が病死者で、コレラや赤痢などの急性感染症による死者が数多くいた。それゆえ、日清戦争は「疾病の戦争」と評価される。一方、10年後に起きた日露戦争では、病死者の割合は減少し、しかも急性感染症は低い数値となった。つまり日本陸軍はこの時、感染症の抑制に成功したのである。それはなぜか。本論文の問いはここから始まる。

本論文は、日本が「帝国」化する際、医療・衛生面において、日清戦争の疾病経験や日本陸軍軍医部の学術水準（本論文ではこれを「学術進歩体制」とする）が基盤となった様相を明らかにしようとする。そして、①日清戦争の疾病経験の具体像を明確化すること、②日本陸軍軍医部がいかなる環境下で、学術的取り組みを行っていたのかを解明することを研究目的として掲げ、三部（全七章）構成を採って論じている。

第一部は、明治期における日本陸軍軍医部の「学術進歩体制」の展開を明らかにする。国内においては、日本陸軍軍医部が一般医学など国内諸機関との間で関係性を構築し、陸軍軍医全体の学術の維持・向上とともに、一般への学知普及を図った。また国際的にも、留学だけではなく、欧米各国陸軍軍医部との間で衛生年報や統計の交換を通じて組織的な交流を図り、学知を国際的に共有するネットワークを形成していく。1900年の北清事変は、こうしたネットワークの交流が実地で展開される場となった。

第二部は、「学術進歩体制」の途上段階で生じた日清戦争での感染症流行の実態を明らかにする。赤痢流行は朝鮮半島の衛生状態の劣悪さ以上に、日本軍自らが駐屯地を汚染したことで起こった出来事だった。コレラ流行も、世界的な流行期に輸送船が大量に移動することによって、コレラ菌が東アジアにもたらされるという人為的な側面があった。このように、日本軍が環境を変えたがゆえの流行であったが、日本陸軍軍医部はそれら感染症に十分な対応ができるほどの知をこの時期は有していなかった。

第三部は、日露戦争における感染症対策の構築過程を明らかにする。そこでは、日清戦争の疾病経験とともに、日本陸軍軍医部の「学術進歩体制」進展が大きな意味を持った。コレラは船舶衛生対策が徹底されることで抑制されるが、そこには細菌学的知見が活かされており、それは日本陸軍軍医部以外の場とのかかわりが大きな意味を持った。赤痢の抑制は、北清事変において欧米の給水技術（学知）を学ぶとともに、国内の諸機関との関係性から構築された体制によって果たされた。

### 【本論文の評価】

本論文は、感染症という人類が直面する大きな問題に近代日本がいかに対応したのか、特に軍事医療という側面からその問いを解明しようとした点で、大きな研究意義がある。特に、次の三点において特筆すべき成果があると評価できる。

第一に、日本史学の方法論だけではなく、様々なディシプリンを理解して咀嚼し、それを基にして様々な視点をもって対象に接近したことで、解明できた事実が数多く

## 論文審査の結果の要旨

あることである。本論文では、近年の日本近現代史において大きな潮流となっている軍事社会史研究が兵士に与えた影響から感染症の問題にアプローチしている状況を踏まえつつ、西洋や東洋を研究対象とした日本の歴史学・医学史研究、欧米の歴史学・医学史研究・人類学などの知見をも丁寧に見、それを活かして日清・日露戦争における日本の感染症問題を検討している。その結果、日清戦争におけるコレラや赤痢の流行が、戦場であった朝鮮半島の元々の環境に起因するだけではなく、むしろ兵士や輸送船の移動によって環境が変化させられたことによって起きたという事実を明らかにした。このように、歴史学だけではなく他の分野の方法論を積極的に活用することで、学問の垣根を越えた新たな地平から問題を解明することに成功した研究と評価できる。

第二に、徹底的な史料調査によって、日本陸軍軍医部の「学術進歩体制」の構築過程や日清戦争における感染症流行の実態、日露戦争における対策の構築過程を明らかにしつつ、広い視野を有して対象を分析した点である。本論文は日本国内の図書館・文書館などに所蔵されている一次史料を博搜して分析し、事例を復元する日本近現代史の方法論が十二分に展開されている。しかしそれだけにとどまらず、海外の図書館・文書館に所蔵されている一次史料を活用する、いわゆるマルチアーカイバルアプローチが採用されている。それによって、日本陸軍軍医部と欧米各国陸軍軍医部の学術的交流が明確となっており、学知を国際的に共有するネットワークのありようが具体的に明らかにされた。近代社会に参入する日本の、医療・衛生面からの「帝国」化の諸相が、一国史的な視点だけではなくグローバルな点からも論じられている点は、これまでの日本近現代史研究にはなく、本論文が今後の研究の指針にもなると考えられる。

第三に、「帝国」化という側面で医療や衛生に関する問題を論じた点である。外国を対象とする研究ではこうした問題に接近したものも存在する。しかし、近代日本をそうした側面から描き出した研究はこれまでなかった。政治・外交・経済から近代日本の歩みを論じる手法だけではない、新たな視点を本論文は提起しており、近代日本の「帝国」化の過程をより多面的・複合的に検討する必要性を今後の研究に示している。

以上のように評価できる本論文も課題はなくはない。現場の経験と学知の関係、そしてそれらが実際の政策にどう反映されるのか、より丁寧な説明が求められよう。また、学知共有ネットワークの双方向性については、重層的に検討する必要があるのではないか。そして、本論文で展開される「帝国」「学術進歩体制」などの概念については、その理論的構築のための考察をさらに磨きあげるべきだと思われる。

とはいえ、こうした課題は、本人の今後の研鑽により、着実に克服されていくものと考えられる。何よりも、本論文によって明らかにされた事実、そして提起された方法論は今後の歴史学・人文科学の研究に与えるインパクトは大きく、課程博士論文としての評価に十分値する重要な視角を提示している。したがって、審査委員一同、本論文は博士（歴史学）の学位付与にふさわしいと認め、合格と判定した。